かたりべ 36

豊島区立郷土資料館だより

右は大都映画撮影所内でのスナップ（昭和15年撮影）。おかもちを持って立っているのは塩瀬の若い衆。うしろの建物は撮影スタジオ。
上の写真は昭和初年の塩瀬の店頭。

大都映画巣鴨撮影所御用達食堂〝塩瀬〟

現在、白山通り沿いにある朝日中学校は、一九二八（昭和三）年から一九四二年頃まで、大都映画という大衆娯楽映画を量産した映画会社の撮影所でした。

この撮影所の前に〝塩瀬〟という食堂があり、先日当時の関係者の方にお話を聞く機会がありました。ここは甘味屋でしたが、ご主人が器用だったため、洋食のメニューなども出していました。ここに大都映画の役者さんやスタッフが数多く出入りしていました。後に撮影所の中に塩瀬の食堂が設けられましたが、外の塩瀬からはおかもちで出前もしていました。

そんな関係で、塩瀬の娘さんであるみえ子さん（現姓北原）は、〝顔パス〟で撮影所への出入りが許され（？）ていたそうです。みえ子さんは「近衛十四郎の子供（松方弘樹）は可愛かった。棒切れを持って『エイッ、ヤッ』てチャンバラごっこをしていました。」と当時のことを回想されています。

また、「（撮影所内の）食堂は食券制だったが、塩瀬の店はツケがきく。月末になると役者さんたちのツケをお祖父さん（塩瀬の経営者）が事務所に取り立てに行っていた。」というお話しもお聞きしました。

「撮影所の前に塩瀬という食堂があり、ツケで食べられるので、そこを利用するわけですが、給料日になると、その食事代のツケで毎月給料は赤字という始末でした。（『懐かしの大都映画』所収）という宮城けんじ氏（現漫才師）の回想とピッタリです。　（伊藤）

特集　新館設立に向けてX　博物館の仕事ってナニ？（4）

地域資料を整理する

これまで「**博物館の仕事ってナニ？**」では、特別展の開催、地域地図集の刊行、史料集の刊行について取り上げました。今回は、博物館の仕事の中で最も地味で目立ちませんが、これが弱まると博物館の調査研究や、教育普及活動が停滞してしまう（人間でいえば日常生活に支障をきたす）「博物館の足腰」ともいうべき重要な仕事について紹介します。

当館では時おり、住民からの資料提供（寄贈）や、調査にともなう資料の発見等によって地域資料の受入れがおこなわれますが、ここに紹介するのは、一九九一年三月に西巣鴨三丁目の榎本泰吉さんから寄贈された数万点にのぼる膨大な種苗（しゅびょう）関係資料（榎本泰吉家資料）です。

今回は、榎本家資料の受入れから「現状記録」・資料整理にいたる過程と、悪戦苦闘の（時には楽しい）整理作業の現状を紹介します。

I　資料の発見から受入れまで

幕末から中山道沿いの巣鴨庚申塚（西巣鴨三―一九）で種苗卸売業を営む榎本泰吉さん（下（カネト）榎本留吉商店五代目、現在は東京種苗㈱）の蔵が解体される、との連絡を文化財係から受けたのが一九九一年三月五日のことでした。

急ぎ現地に駆けつけると、すでに解体業者が蔵から次々と大量の資料を運び出していて、あたり一面にほこりがもうもうと立ち込めていました。「一歩遅かったか…」。残念ながら蔵内部の資料の現状（蔵のどこに、どういう状態で資料が保管されていたのか）を記録することはできませんでした。しかし、文化財係が偶然に情報をキャッチしていなければ、これらの資料はこの世から消えていたかもしれないのです。

さっそく、木箱や野菜ケース、南京袋等に小分けされた種苗関係資料を資料館に一括寄贈していただけるようお願いし、トラックを手配して、運び出した資料を業者に燻蒸（くんじょう）（薬品による殺菌・殺虫・殺カビ）してもらいました。この日寄贈された資料は、南京袋九個と大小の箱二〇個の文書資料（推定約五～六万点）、種見本のビン・和文タイプライター・一升ます・桶など一二点でした。

写真奥の蔵から出した資料の一部（文化財係提供）

II　資料整理の体制づくり

戦災と処分を免れ、無事豊島区の財産となった榎本家資料は、明治・大正期から昭和中期までの百年以上にわたる、種苗業者の経営状況や取引活動を浮き彫りにするだけでなく、これまであまり知られていなかった種苗を通しての全国的規模の商業交流の実態を把握することができる、大変貴重な資料であるといえます。具体的には、種苗の注文や照会のはがき・書簡類が中心で、出荷記録、帳簿、カタログ類のほか、教育・信仰関係資料など多岐にわたっています。

しかし、傷（いた）みや汚れ、破損がひどいものも多く、これらの膨大な資料をいかに効率よく正確に整理するか、そして現状を崩さずに資料を保管し、今後の調査研究や一般の利用にどのように役立てていくかが、課題となりました。

そこで榎本家資料については、資料館友の会の古文書サークルで活動している地元の主婦、阿部・嘉津山・小池・須田・関根（今年三月から伊藤）さんの五名に資料整理員となっていただき、年間契約で継続的に資料整理ができる体制を整えました。本来ならば大学の先生や学生による調査会を作って大掛かりな資料整理・調査を行なうところですが、予算規模の小さい資料館では無理ですので、地元の歴史や事情に詳しい地域住民が主体となって、自分たちの地域の資料を整理する方法をとることにしたのです。そして本格的に整理作業を開始したのは、受け入れから九か月後の一二月のことでした。

III 「現状記録」の方法

文書資料の整理については、特に榎本家資料のような近現代資料の場合、統一的な分類方法はまだ確立されていませんので、各博物館で整理方法に違いがありますが、資料整理にあたっては、よくいわれている次の一般原則を踏まえておく必要があります。それは、(1)資料を平等に大切に取り扱うこと。(2)その家の資料は分割せず、一括して整理すること。(3)資料がどこに、どのような状態であったかを記録し、資料の位置や状態を変えないこと。(4)個々の資料の原形を尊重すること、というものです。

これらを念頭において資料館では、「現状記録」→文書カードに記入→中性紙封筒に保管の手順で整理作業を行なっています。

「現状記録」とは前述の(3)にあたり、資料館では、数年前から房総史料調査会が行なってきた方法を参考にしています。具体的には、受け入れ時の箱や袋を一つの単位とみなして「イロハ…」と名付け、容器を含めた外観を実測や写真、スケッチによって記録します。次に容器の中の資料を上から順に、ある程度のまとまりごとに取り出し、「あいう…」と名付け、それぞれ実測、写真、スケッチで記録した後、状態を崩さずに中性紙封筒にいれます。この作業は学芸員と整理員が共同で行ないます。容器の中の資料をすべて分け終えたら、いよいよ一点ずつ文書カードに記入する作業に入ります。

「現状記録」作業の写真撮影①

「現状記録」作業の写真撮影②

IV 悪戦苦闘の文書整理

資料館では縦七・五×横一二・八cmの文書カードを使い、受入番号、表題（資料名称）、作成年月日、作成者（差出人）、受取人、形態・数量（枚・冊・綴など）、備考（寸法・資料の状態など）を、資料を見ながら記入していきます。この作業は、次々と新しい資料と出会えるのですから、わくわくしながらの楽しい作業と思われがちです。確かに未知の世界と遭遇する喜びは資料整理の醍醐味（だいごみ）ですが、実際にはそう簡単なものではありません。

一つの整理封筒には何百というはがきや書簡類があり、その多くは劣化が激しいので、資料の扱いにはかなり神経を使います。当然身体や服は汚れます。また種苗の注文、照会、苦情、出荷記録などの似た内容が延々と続くので、根気との勝負になります。しかも、くずし字や誤字・脱字、当事者間で通用する言い回しや前後の繋がりのない資料が、突然出てきたりするので、差出人の意図が読み取れず、頭を悩ますことがしばしばあります。また、知らない地名や野菜・草花の品種名などの用語が頻繁

整理員による文書カード記入作業

にでてきますので、それらを解読するために事典類をひっくり返しての体力仕事となります。まさに資料整理は「資料との格闘である」といってもいいかも知れません。

こうして格闘を終えた資料は、中性紙封筒の中でしばしの眠りにつき、整理員はつかの間の充実感（？）を味わうのです。

V 地域資料の活用にむけて

資料整理は一ヵ月に一人五日平均で行なっています。整理を終えた資料は、一一月一日現在で一七、一五〇点（一三箱分）です。

整理作業は各自が都合のよい日に資料館に来て行なうため、特殊な資料の整理方法等の問題が出てきた時は学芸員と相談し、決定事項は申し送りノートに書き込んで、情報の共有化を図っています。また年に数回意見交換会を開き、進行状況や疑問・問題点について学芸員と話し合いをしています。そこで出された整理員の意見や感想を、最後に紹介しましょう。

――資料に書かれている情報をどこまでカード化すればよいのか、迷います。資料目録の作成とともに、資料集の刊行が待ち遠しい。

――一枚のはがきや手紙からも、当時の生活や時代背景がわかって興味深い。戦時中の統制で種苗取引が制限されたり、不作や豊作で種の相場が大きく変わったり…。

――はがきや手紙に貼ってある切手だけを調べても面白い。「国民そろってラヂオ体操」「求めよ国債、銃後の力」など昭和一〇年代の消印の標語からも時代が見えてきます。

――榎本さんの取引は全国的ですが、特に栃木・茨城・群馬・長野・千葉などの関東地方が多いようです。また戦前は「満州」や中国からの注文があり、戦後はデンマーク・オーストラリアなどからも売り込みに来ています。

――大正・昭和初期には種の行商が多かったことが、旅先の旅館から来た注文はがきなどからわかって興味をもった。足袋やたんす、時計商が種子を売っていたのは驚きでした。

――滝野川牛蒡、練馬沢庵大根など地名入りの品種を集めて調べてみたい。豊島区の地名の付いた品種があってもいいのに…（その後「巣鴨小かぶ」注文の資料が出て感激！）。滝野川の種子は全国から買い入れに来ていますね。

みなさん意欲的に整理作業に取り組み、興味関心のあるテーマを調べたりと、資料整理の成果が少しずつ出てきているようです。資料館では、来年度から榎本家資料目録の刊行に向けた編集作業に着手したいと考えています。また将来的には、榎本家資料集の刊行、整理員との共同企画の特別展の開催、研究論文集の刊行等を計画していますので、ご期待ください。（横山）

郷土資料館なんでもQ&A

Q 昭和二四年に封切りされた名匠小津安二郎監督の映画「晩春」に能楽堂の場面が出てきます。この能楽堂は駒込にあったものと聞きましたが、詳しく教えて下さい。

A 映画「晩春」で原節子と笠智衆が能を観に行く場面で使われている能楽堂は、駒込駅近くにあった染井能楽堂です。昭和三六年発行の『演劇百科大事典』（平凡社）には、「染井能楽堂（豊島区駒込四ノ一五。四〇〇名収容）」とあります。この住所は現在の駒込四―二一三一の辺りになり、今はゴルフ練習場になっています。この能楽堂は松平家の中にあったもので、元は前田家の屋敷にあったものを移転したものだそうです。戦災を逃れたために、戦後すぐの映画のロケに使われたものと思われます。昭和四〇年代まではあったそうですが、取り壊されました。しかし、その能楽堂の用材が横浜市の管理する所となり、平成八年の開場を目指して計画が進められている横浜市掃部山公園の能楽堂として、染井能楽堂が復活することになったようです。現在その復元のための調査が行われており、特に外観の写真を探しています。もし染井能楽堂の写真や情報をお持ちの方がおりましたら、郷土資料館までご一報していただければ幸いです。（小林）

連載　一点の資料から《その10》　旋盤が語る鉄工所のあゆみ

「こりゃ驚いた。まさか親父が作った旋盤がこんなところにあるとは…。」一〇月一日、特別展「町工場の履歴書」を見学に来られた小川昌男さん（大正一一年生まれ）と旋盤の劇的な出会いにより、戦前池袋にあった鉄工所の歴史がまたひとつ明らかになりました。

この旋盤は、上池袋一丁目の井沢鉄工所の井沢芳雄氏が、昭和三〇（一九五五）年頃中古品を購入して使っていた英式旋盤で、特別展の調査で偶然発見したものです。「東京市外西巣鴨池袋672小川鉄工場」のプレートと『全国工場通覧』（商工省編纂）から、大正一〇（一九二一）年小川信太郎が池袋に創業した鉄工所で作られた旋盤であることがわかりました。

まさに戦前の東池袋地区が「鉄工所のまち」であった（昭和一四年、池袋には従業員五人以上の鉄工所は五二あった）ことがうかがい知れる貴重な資料の発見でした。しかし小川鉄工所についてはその実態は不明のままだったのです。

さっそく創業者信太郎の長男で、二代目の昌男さんにお話を伺いました。信太郎（明治二五年生まれ）は袖ヶ浦市飯富の出身で、一六才で上京、巣鴨村大字池袋の太田鉄工所（明治三七年創業、工作機械を製造）で修業を積んだ後、大正一〇年西巣鴨町大字池袋字下り谷に工場を構え、昭和五年池袋字蟹窪六七二に移転しました。したがって、この英式旋盤は昭和五年から七年の区制施行以前に製造されたことになります。

工場では、工作機械の製造のほか各種機械修理も行ない、「信さんちょっと頼む」と小林ゴム製造所、王様クレヨン商会、佐久間製菓のドロップ工場、印刷工場、メリヤス工場など、周辺工場から機械製造や修理の依頼が相次ぎました。また米式四尺旋盤によって「小川の旋盤」は一躍有名になり、中島飛行場の下請工場や沢藤電気などから注文が殺到したといいます。

昭和一二年には板橋区志村に第二工場を設けて従業員六〇名を抱えるまでになりましたが、戦時体制に入ると、池貝鉄工グループに属して「戦時型旋盤」を製造し、また海軍の指定工場となって人間魚雷の部品を製造するなど、軍需産業へと変わっていきます。

旋盤と感激の対面をした小川昌男氏。

工場前の小川信太郎とダットサン。1940年撮影。小川昌男氏提供。

そして、昭和二〇年四月一三日の空襲で池袋工場は焼失し、戦後は志村工場で再出発しました。昌男さんは印刷機械の改造と部品製造に着手して各種グラビア輪転印刷機を開発し、昭和三四年に新工場を建設、旋盤を海外に売り出すなど、業績をのばしてきましたが、昭和五二年一二月会社は解散し、その際に小川鉄工所の関係資料はすべて処分してしまいました。

戦前の池袋の鉄工所の歴史を物語る唯一の資料といえる旋盤は、展示会終了後再び井沢鉄工所の片隅に眠ることになります。手動式旋盤が使われなくなった現在、この旋盤もやがて粗大ゴミとして捨てられるのでしょうか。戦前の貴重な産業資料の一つとして保存していくことができないか、今その方策に思いを巡らしているところです。

（横山）

博物館実習生のひとりごと ―実習を終えて―

当館では、去る九月一六日から三〇日までの二週間、博物館学芸員実務実習を行い、今年は五大学から五名の学生を受け入れました。

実習生たちは、この短い期間に、博物館の活動に関わる様々な仕事（資料整理、写真撮影および焼付、館外調査、特別展の監視など）を体験するのはもちろん、最終的には、特別展の展示シナリオ案を班ごと作成しました。最終日には、作成したシナリオ案を報告しあい、意見交換を行なって実習を終えました。

以下、二週間の実習をけなげに耐え抜いた実習生から寄稿していただいた〝実習体験記〟五編を掲載いたします。卒業論文等で忙しい時期にもかかわらずご寄稿いただいた実習生の皆さま、どうもありがとうございました。

実習経験を活かしたい

大学で博物館学の授業を受けながらも、実際に実習を行うまで、学芸員とは博物館で歴史的遺物を管理する倉庫番であるといった認識しかもっていなかった。おそらく、世間一般の学芸員に対する認識もその程度のものではないか。

しかしながら、その実態は……。がらくたとして捨てられる運命にある古い日用品を立派な歴史的価値のある生活資料として蘇らせ、またその一方で、近代化の波に埋もれつつある地元の古い姿の記録に奔走し、あるときはカメラマン、またあるときは工芸家、そしてまたあるときは指導教官と、いくつもの仕事を器用にこなすスーパーマン的存在であった。

現在、学芸員への登用の門は狭く、採用率は一%にも満たないが、この実習経験は何らかの形で活かしていきたいものである。〔東海大学文学部文明学科四年　坂本恵美〕

やるだけの価値のある仕事と実感

今、学芸員の資格を取得したからといって、学芸員という職務に就くのは大変困難ですが、いつその機会がやってくるとも限りません。そんな希望をもちつつ、資格取得のために実習を行なったのですが、本当に勉強になることが多く、私にとって充実した期間でした。

実習内容は大学の専攻外のことばかりだったのですが、大変わかりやすく、かつ細かなところまで踏み込んで指導をしていただき、当初の私の予想を遥かに上回る実習をさせていただきました。私の狭かった視野も、少しは幅が広がったように思います。学芸員としての実務や知識はもちろんのこと、二週間のなかで学芸員の仕事がいかに大変であるかを、資料館のなかで学んだように思います。

私のイメージのなかの学芸員像とは異なり、様々な対応と作業に追われる学芸員の皆さんの姿が印象的であり、私にとって違った意味での収穫となりました。しかし、やりがいのある仕事であると思いますし、やるだけの価値のある仕事であると改めて感じました。〔立正大学文学部史学科四年　佐々木満〕

作業内容が館の記録として残るとは…

長いようで短かかった博物館実習の二週間を振り返ってみると、本当に充実していたな、と改めて思います。

生活資料・文書資料の整理から特別展の監視や館外調査まで、こんなに幅広くたくさんのことを教えていただけて、また実際にやらせていただけたことは、とても有意義な経験でした。

以前から興味があった写真の撮影・焼付をほとんど自分でやらせていただけたし、文書整理では資料を扱うことの面白さを教わりました。そして何よりも、各作業で未整理の資料を任せていただけたことは、緊張もしましたがとても

感激しました。

ただ任せていただいたのは嬉しかったのですが、これは同時に、私の行なった作業が館の記録として残ってしまうということを意味しており、それが少し気にかかります。あの拙いスケッチや修正液の跡が目立つ資料カードが残ってしまうなんて、恐ろしいような、申し訳ないような複雑な気分です。寛大なご処置には本当に恐縮するばかりです。〔東洋大学文学部史学科四年　相場弘美〕

立場を変えて展示をみる重要性

今まで、博物館や美術館を見学する際、最初に展覧会の企画意図を読み見終わってから、会場全体を通して意図について考えていたように思えます。だから、好きな作品は時間をかけて見ますが、あまり好きでない作品は歩きながら見て終わりにしていました。

しかし、展示シナリオの作成をし、ひとつひとつの作品においても、意図をおきながら配置を考えていくという作業が必要だということを改めて実感しました。

また、地域博物館としての役割は何であるのか、地域博物館の色をどう出し、どう利用してもらうかという考えを念頭におき、客観的に構成しないと、見てもらう人に作品だけで意図を読み取ってもらうことができず、一人よがりの展示になり成功しないということがわかりました。

今後もいろいろな博物館を見てまわると思いますが、この実習を受けたことにより、これからは主催者側の立場に立って、展示を見ることができるのでは、と思います。〔跡見学園女子大学文学部美学美術史学科四年　有田由美〕

施設見学の際訪れた雑司が谷宣教師館にて（前列左から、坂本・佐々木、後列左から、相場・有田・早川の各氏）

モノで表現することの難しさ

豊島区立郷土資料館での実習の二週間、それは困難の連続であったといえます。

その中で最も大変だったことは、展示シナリオの作成です。資料館の展示室を使って自分たちでテーマを選び、特別展の企画書を作るのですが、私は最初論文を書くようなものと軽く考えていました。ところが、実際はそんなに甘いものではありませんでした。論文は言葉を使って説明し、流れを作ることができますが、博物館の展示は、基本的に〝物（資料）〟によって説明し、テーマの流れを作っていかなければならないのです。私たちの選んだテーマは池袋へのデパート進出についてだったので、実際に展示する資料が少なく説明文ばかりになってしまうので、展示スペースを埋めるのに苦労しました。

狭い狭いと思っていた資料館の展示室がどんなに広く感じられたことか。私は、学芸員の方々は特別展のたびにこのような苦労をなさっているのだと初めて知り、尊敬の念をおぼえました。〔立教大学文学部史学科四年　早川直子〕

郷土資料館職員一同、実習生の皆さまの今後のご活躍をお祈りしています。がんばってくださいネ。

（秋山）

豊島区立郷土資料館からのお知らせ

★常設展示の展示替えのお知らせ

特別展「町工場の履歴書」の終了に伴い、常設展示室・収蔵展示室の展示替えを行ないました。ヤミ市模型・アトリエ村模型をはじめとする通常の展示のほか、新収蔵資料の展示も行なっています。おもな展示内容は、以下のとおりです。みなさまのご来館をお待ちしております。

◎町工場の履歴書（抄）

特別展「町工場の履歴書」で展示した資料のうち、神田川近くで、江戸時代以来最近まで約一七〇年間営業を続けてきた、印半纏（しるしばんてん）手拭い染め専門の大坂屋染物店関係資料のほか、古くから染物業者の信仰を集めてきた板橋区日曜寺の愛染（あいぜん）信仰に関する写真・資料を展示しています。

◎組紐職人の世界

先日、区内池袋に居住される土山氏より江戸組紐に関わる道具類を一括寄贈されました。

豊島区をはじめとする東京の城北地区は組紐生産が盛んな地域で、昭和一六年（一九四一）には、約二〇〇人いた組紐職人のうち八〇人がこの地区に居住していました。西巣鴨から板橋中宿あたりまでの中山道を歩くと、組玉のふれ合う音がよく聞こえたということです。

そこで、今回の展示では、当該地域の特徴的な伝統技術である組紐を「組紐職人の世界」という名のもと、土山氏より寄贈された組紐道具を中心に展示・解説しています。

★歴史講座開催のお知らせ

郷土資料館では、以下の日程で歴史講座「江戸の『境界』を考える」（全四回）を開催いたします。詳しい応募方法については、「広報としま」に掲載する予定ですので、その掲載内容に沿ってお申し込みください。

第1回　2月4日（土）午後2時～4時
演題　江戸っ子の実像
講師　竹内誠氏（東京学芸大学教授）

第2回　2月18日（土）午後2時～4時
演題　江戸四宿の内と外
講師　柘植信行氏（品川区教育委員会学芸員）

第3回　2月25日（土）午後2時～4時
演題　江戸庶民の「境界」観
講師　鈴木章生氏（江戸東京博物館学芸員）

第4回　3月4日（土）午後2時～4時
演題　江戸の「境界」さまざま
講師　宮田登氏（神奈川大学教授）

【演題は仮題、会場は勤労福祉会館会議室】

編集後記

今年度の特別展「町工場の履歴書」も先日無事終了し、また、各種の講座も予定どおり消化しつつあります。現在は、資料整理、調査・研究活動と並行して、来年三月に刊行予定の史料集二冊の執筆・編集作業を急ピッチで進めているところです。

＊　＊　＊

「郷土資料館からのお知らせ」にもあるように、来年の二月初旬からは、久しぶりに近世史に関わる連続講座を開催する予定です。詳しい応募方法は「広報としま」でお知らせいたしますので、お見逃しなく。新しい年を迎えたあとも郷土資料館の事業にご注目願います。

それでは、いろんな意味を込めまして、来年も〈は？・こそ？・から？〉良い年になりますように！【ちょっと気の早い編集子でした】

かたりべ
No.36
1994年12月5日
豊島区立郷土資料館
豊島区西池袋2-37-4
電話03－3980－2351
豊島区広報印刷物L3-06-091
本紙は再生紙を使用しています